

# 嵯 峨 遺 跡

2014年

古代文化調査会







# 嵯 峨 遺 跡

2014年

古代文化調査会



## 例　　言

1. 本書は、古代文化調査会が京都市右京区嵯峨天龍寺北造路町1番地において、マンション建設に伴い実施した嵯峨遺跡（13S689）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は株式会社アクセス都市設計より委託を受けた古代文化調査会の上村憲章が担当した。
3. 調査にあたっては、京都市文化市民局文化財保護課の指導を受けた。
4. 本書の編集・執筆は上村がおこなった。
5. 図面及び遺構・遺物の整理、遺構の製図は上村がおこない、遺物の実測は板谷桃代がおこなった。
6. 本書で使用した方位及び座標の数値は世界測地系（新測地系）平面直角座標系VIによる。記載した数値はm単位で、水準はT.P.（東京湾平均海面高度）である。
7. 本書で使用した地図は、国土地理院発行の25,000分の1（京都西北部）、京都市都市計画局発行の2,500分の1の地図（大覺寺）を調整し、使用した。
8. 土壌及び土器・瓦類の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に準じた。
9. 遺物番号は実測図・写真ともに共通している。
10. 発掘調査及び遺物整理に際して、下記の方々の御指導・御協力を得ることができた。記して感謝の意を表します。（所属・敬称略、五十音順）

家原圭太　馬瀬智光　鈴木久史　津々池惣一　西森正晃　挟間　崇　堀　大輔  
宮原健吾　吉本健吾  
(株) アクセス都市設計　(株) 明輝建設　(株) 大高建設　阪急不動産(株)  
(公財) 京都市埋蔵文化財研究所　(有) 京都編集工房

## 本文目次

### 嵯峨遺跡

I 調査の経緯	1
II 調査の経過	1
III 遺構	4
IV 遺物	15
V 小結	18

## 図版目次

図版1 遺跡	1 調査前風景（南東から）
	2 調査区全景（南東から）
図版2 遺跡	1 調査区中央部（南東から）
	2 調査区東部（北西から）
図版3 遺跡	1 土壙94（北西から）
	2 土壙144（南東から）
	3 土壙242（東から）
	4 溝362（東から）
	5 柱穴14（南から）
	6 柱穴19（南から）
	7 柱穴33（南から）
	8 柱穴70（南から）
図版4 遺跡	1 柱穴360（西から）
	2 柱穴233（南から）
	3 柱穴353（南から）
	4 柱穴219（南から）
	5 柱穴270（南から）
	6 柱穴75（南から）

- 7 柱穴 300 (南から)
  - 8 柱穴 310 (南から)
- 図版5 遺跡 1 柱穴 329 (南から)  
 2 柱穴 239 (西から)  
 3 土壙 124 (北から)  
 4 土壙 248 (南西から)  
 5 土壙 245 (西から)  
 6 土壙 52 (南から)  
 7 土壙 45 (東から)  
 8 土壙 47 (南から)
- 図版6 遺物 土壙 231・土壙 242 出土遺物
- 図版7 遺物 土壙 242・土壙 8 出土遺物
- 図版8 遺物 土壙 94・土壙 245・土壙 61 出土遺物

## 挿 図 目 次

図 1	調査地点位置図	1
図 2	調査地位置図	2
図 3	平面実測図	5
図 4	壁面実測図 1	6
図 5	壁面実測図 2	7
図 6	遺構実測図 1	8
図 7	遺構実測図 2	9
図 8	遺構実測図 3	10
図 9	遺構実測図 4	11
図 10	遺構実測図 5	12
図 11	土壙 231 出土土器実測図	15
図 12	土壙 242 出土土器実測図 1	15
図 13	土壙 242 出土土器実測図 2	16
図 14	土壙 8 出土土器実測図	16
図 15	土壙 94 出土土器実測図	16
図 16	土壙 144 出土土器実測図	16
図 17	土壙 245 出土土器実測図	16
図 18	土壙 61 出土瓦拓影・実測図	17

## 表 目 次

表1 遺物概要表.....	18
表2 揭載遺物一覽表.....	20

# 嵯峨遺跡

## I 調査の経緯

調査地は、京都市右京区嵯峨天龍寺北造路町1番地である。

当該地は寺院跡の嵯峨遺跡にあたる。阪急不動産株式会社によりマンション建設の計画がなされ、工事に先立ち京都市文化財保護課が試掘調査を実施した。試掘調査の結果、中世の遺構が良好な状態で遺存していることが判明し、発掘調査の必要性が考慮されるに至った。京都市の指導の下、株式会社アクセス都市設計との協議の結果、当調査会が発掘調査をおこなうこととなった。

## II 調査の経過

敷地は臨川寺旧境内北辺東部に接し、天龍寺東門へ通する道が、瀬戸川（旧芹川）にかかる龍門橋の北西部分あたる。『京都市の地名』日本歴史地名体系27・平凡社によると、天龍寺北造路町は「天龍寺門前村」にくくられており、「京都市遺跡地図台帳」（京都市文化市民局）によると嵯峨遺跡は、鎌倉時代に亀山殿が築かれて以降、天龍寺、臨川寺、鹿王院などの禅宗系

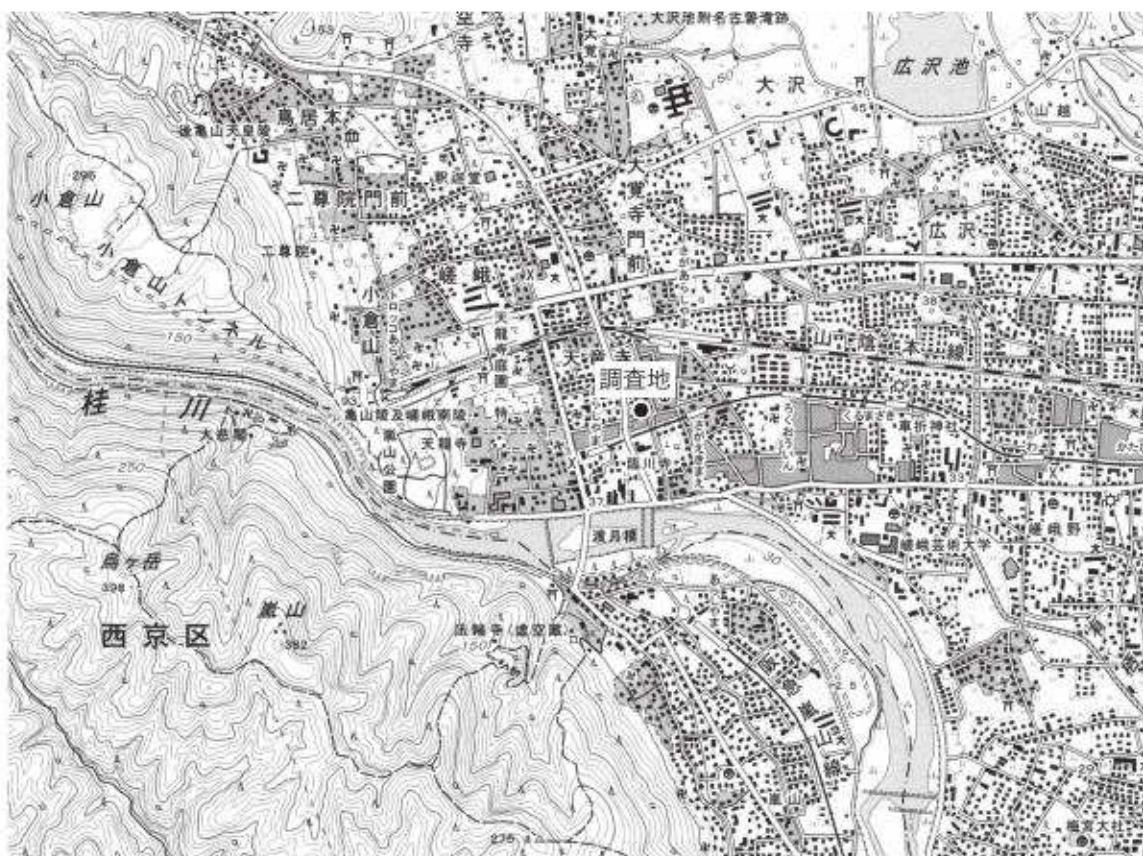


図1 調査地点位置図 (1/25,000)

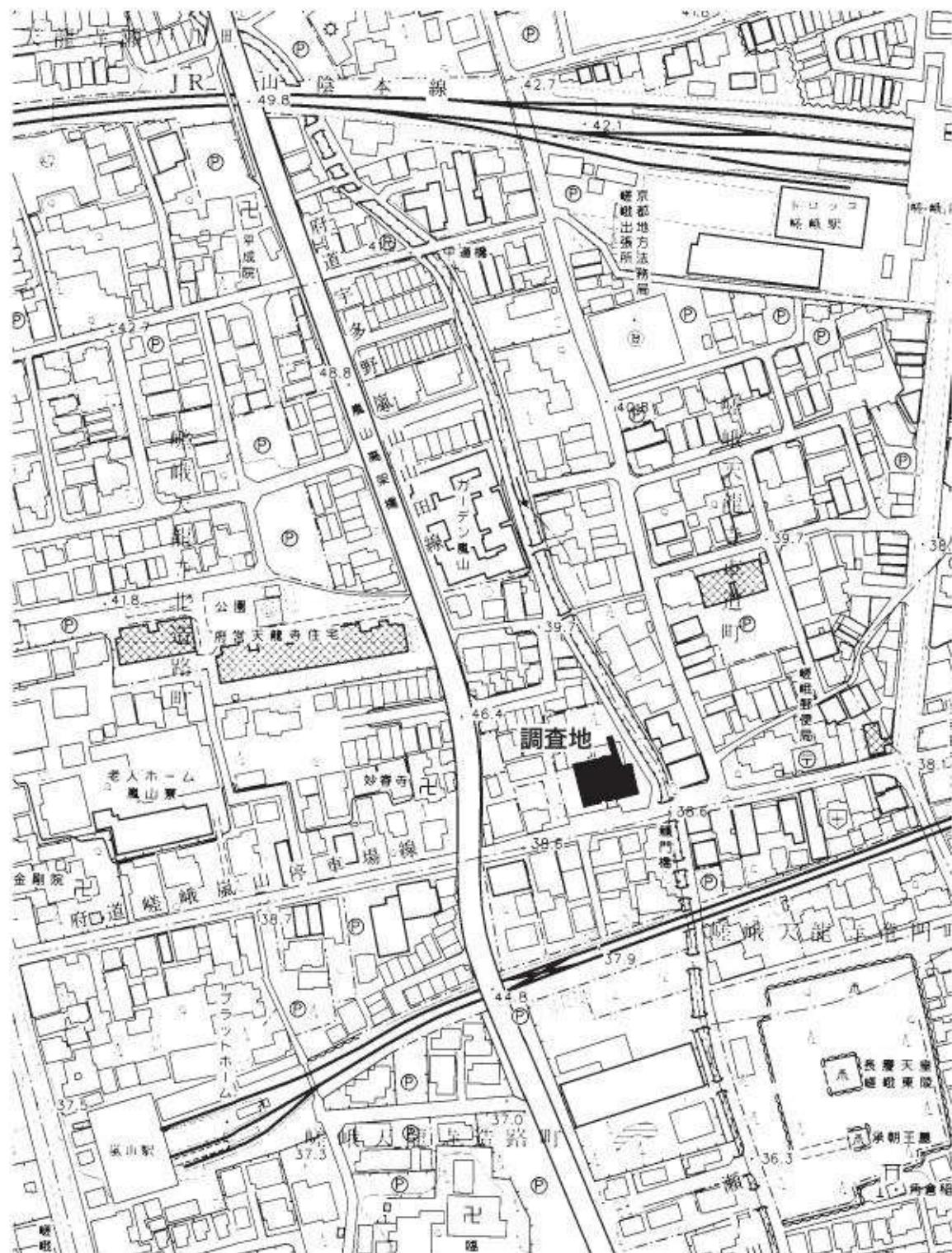


図2 調査地位置図 (1/2,500)

寺院の成立に伴い、南北朝期から室町時代に著しく発展した寺院街とされている。室町時代の「応永鈔命絵図」(鹿王院所蔵)には寺院配置が描かれ、同絵図によると当該地は「在家」と記されており天龍寺門前村の一部であったと推測される。

天竜寺は、足利尊氏が後醍醐天皇の冥福を祈るために夢窓国師を請じて創建。興国年間(1340

～45)には七堂伽藍を整えた。この地は後醍醐天皇とのゆかりも深く、天皇が幼少の時にはここにあった仙洞龜山殿で修学したといわれる。最初の寺格は京都五山の第二位であったが至徳三(1386)年に南禅寺が別格になるとともに第一位に列した。寺域は約950万m<sup>2</sup>と広大なもので、子院は150カ寺を数えたといわれている。

また、被災の回数も多く、延文三(1358)年、貞治六(1367)年、応安六(1373)年、康暦二(1380)年、文安四(1447)年、応仁二(1468)年、文明十二(1480)年と、7回も火災に遭っている。近世にはいっても文化十二(1815)年、元治元(1864)年(=禁門の変)で被災している。

調査は平成26(2014)年7月22日から同年9月24日までの間、調査面積413m<sup>2</sup>(敷地面積約1292m<sup>2</sup>)を設定、実施した。平面直角座標系VIによる基準点測量データを使用し、4mメッシュのグリッドを設定し、遺構遺物の記録をとる方法をおこなった。現場の基本図は20分の1で実測した。

### III 遺構

調査地の南に接する天龍寺の東西方向の造道は東で約13°ほど北へ振れる。現在の天龍寺東辺を通る愛宕路も同じような振れがあり、路地もこの影響を受けている。この辺りの条理が持っていた振れであろうと推測される。今回の調査で見つかっている中世の溝や、近世の石組もこの影響を受けて直角座標系に対して同じような振れを持っている。調査区は標高39.1～39.4mで、調査区東側には瀬戸川が南流する。表土下0.4～0.5mで遺構面に達する。地山は暗褐色～黒褐色系の泥砂層で、下層は黄褐色系の粘質土となる。遺構は天龍寺が創建されて以降から(14世紀中頃)のものが大半であり、土壙、柱穴、溝など江戸時代のものも含め総計364基を検出し調査した。

室町時代以前（13世紀以前）

室町時代以前にさかのほる遺構は確認されていない。

14世紀前半代

土壙43・231、柱穴49等がある。土壙231は壇内に多量の焼土が投棄されていた。

14世紀後半

溝13、柱穴68・97がある。

14世紀後半～15世紀前半

柱穴25・70・95・96・98・105・106・112・158・160・252・255・257・262・263・287・294・323・325・335・336・353・360、土壙8・10・56・94・124・144・157・221・222・242・300・340がある。

**土壙8**（図版1の2、図3）

南北8.0m以上、深さ0.6m程を測る。土師器が大量に投棄されており10YR4/3にぶい黄褐色の泥砂が堆積する。溝362に切られる。

**土壙94**（図版1の2・2の1・3の1、図3）

東西4.6m、南北2.5m以上、深さは0.28m程を測る。多量の土師器皿類と、北西部を中心に焼土が堆積していた。10YR3/2黒褐色泥砂が堆積。

**土壙124**（図版1の2・2の1・5の3、図3・9）

南北0.68m、東西0.65m、深さ0.28mを測る。土器や碟が集中しており、備前産と思われる甕の破片が目立った。10YR3/3暗褐色砂泥が堆積。

**土壙144**（図版1の2・2の1・3の2、図3）

調査区中央部から東寄りで検出。土師器皿が多量に出土するとともに多量の焼土が認められ

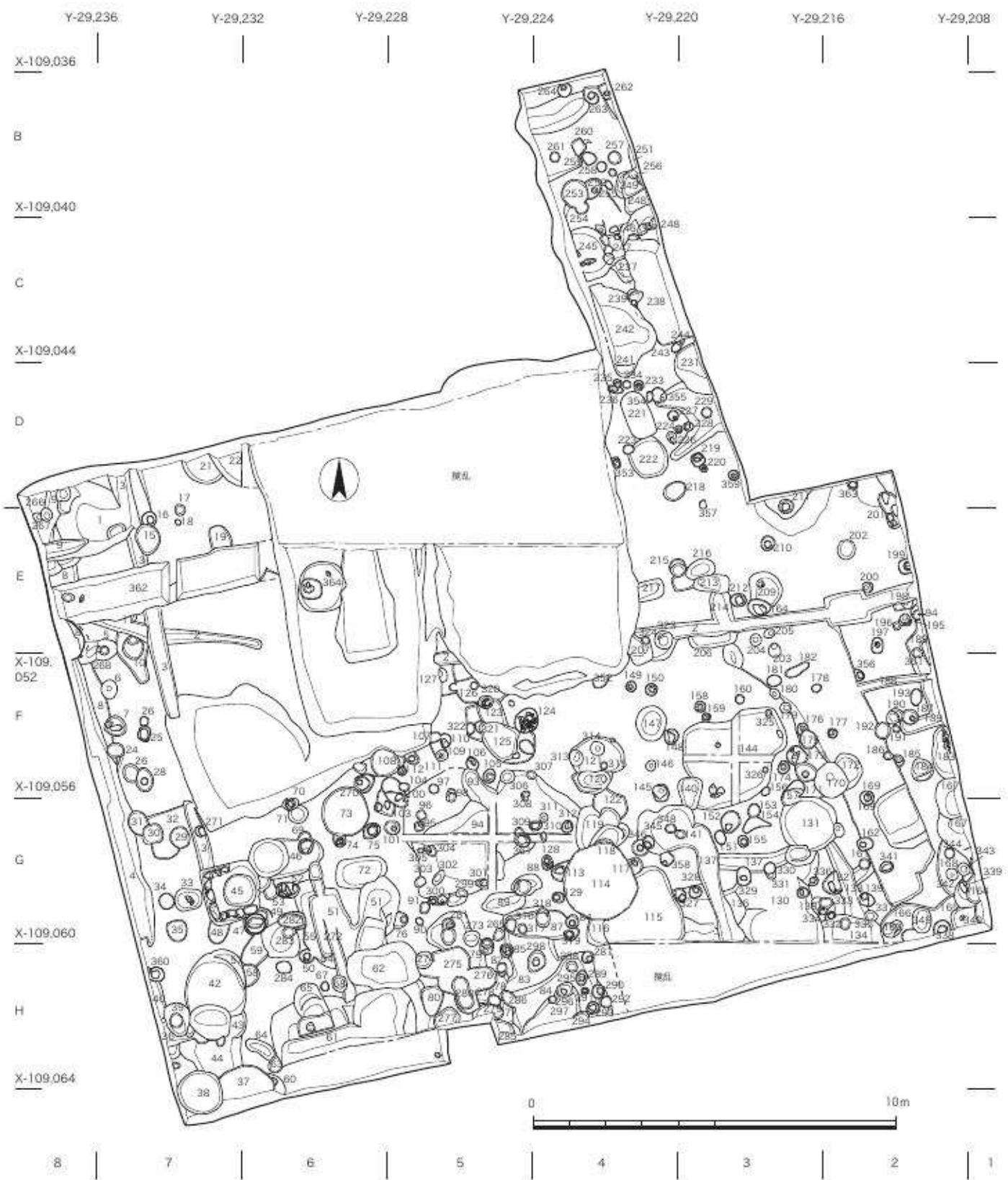
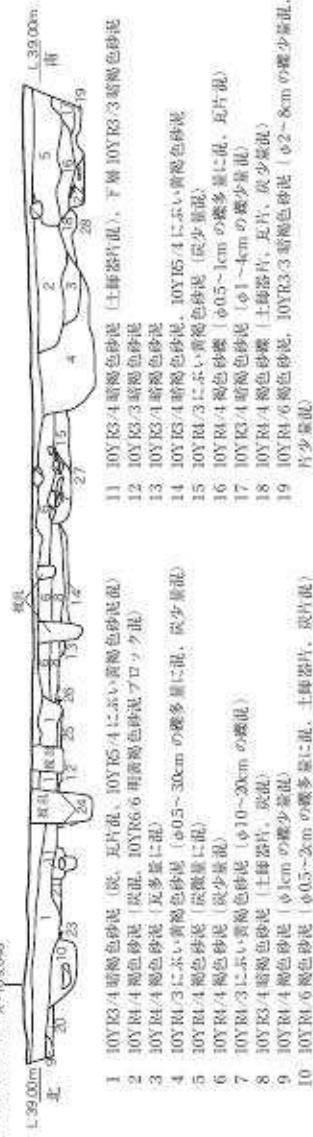


图3 平面实测图 (1/150)

東壁北部実測図 X-103-040



東壁南部実測図 X-103-048



南壁東部実測図 Y-23-216



南壁東部実測図

南壁東部実測図名表

1. 10YR3.3 黄褐色砂泥
2. 10YR4.3 にぶい黄褐色砂泥 (0.5cmまでの層)
3. 10YR4.3 にぶい黄褐色砂泥 (砾石)
4. 10YR3.3 黄褐色砂泥 (0.5cmまでの層少量、土師器片、灰混)
5. 10YR4.4 黄褐色砂泥
6. 10YR3.2 黄褐色砂泥 (砾石)
7. 10YR4.3 黄褐色砂泥 (0.10cmの層少量混)
8. 10YR4.4 黄褐色砂泥 (灰微量に混)
9. 10YR4.6 黄褐色砂泥 (0.2cmまでの層少量混、土師器片少量混)
10. 10YR4.4 ~ 4.6 黄褐色砂泥 (0.2cmまでの層少量混)
11. 10YR3.3 黄褐色砂泥 (0.1~4cmの層少量混、瓦混)
12. 10YR4.6 黄褐色砂泥 (10YR3.3 黄褐色砂泥 (0.2~8cmの層少量混、瓦混)の上部)
13. 10YR4.3 ~ 3.4 黄褐色砂泥 (0.2cmまでの層少量、土師器片、灰混)
14. 10YR4.2 黄褐色砂泥 (0.10cmまでの層、土師器片、灰少量混)
15. 10YR4.6 黄褐色砂泥 (0.4cmまでの層、土師器片、灰少量混)
16. 10YR4.6 黄褐色砂泥 (灰少量混)
17. 2.5Y4.4 オリーブ褐色砂泥 (0.1~4cmの層)
18. 2.5Y6.6 明黄褐色砂泥 (瓦混)
19. 10YR3.3 黄褐色砂泥

南壁西部実測図



図4 壁面実測図1 (1/100)

図4 壁面実測図2 (1/100)

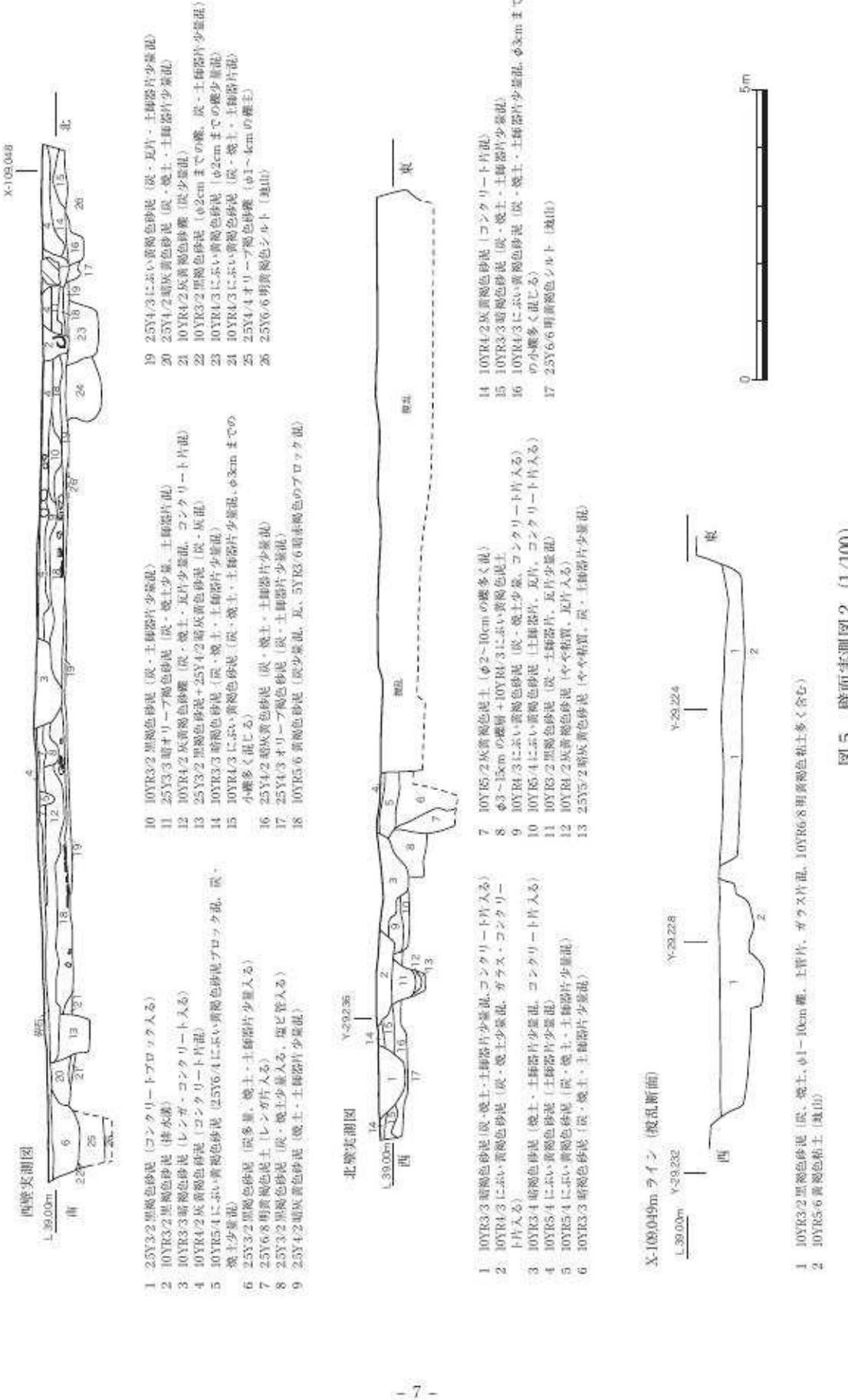


図5 緯面実測図2 (1/100)

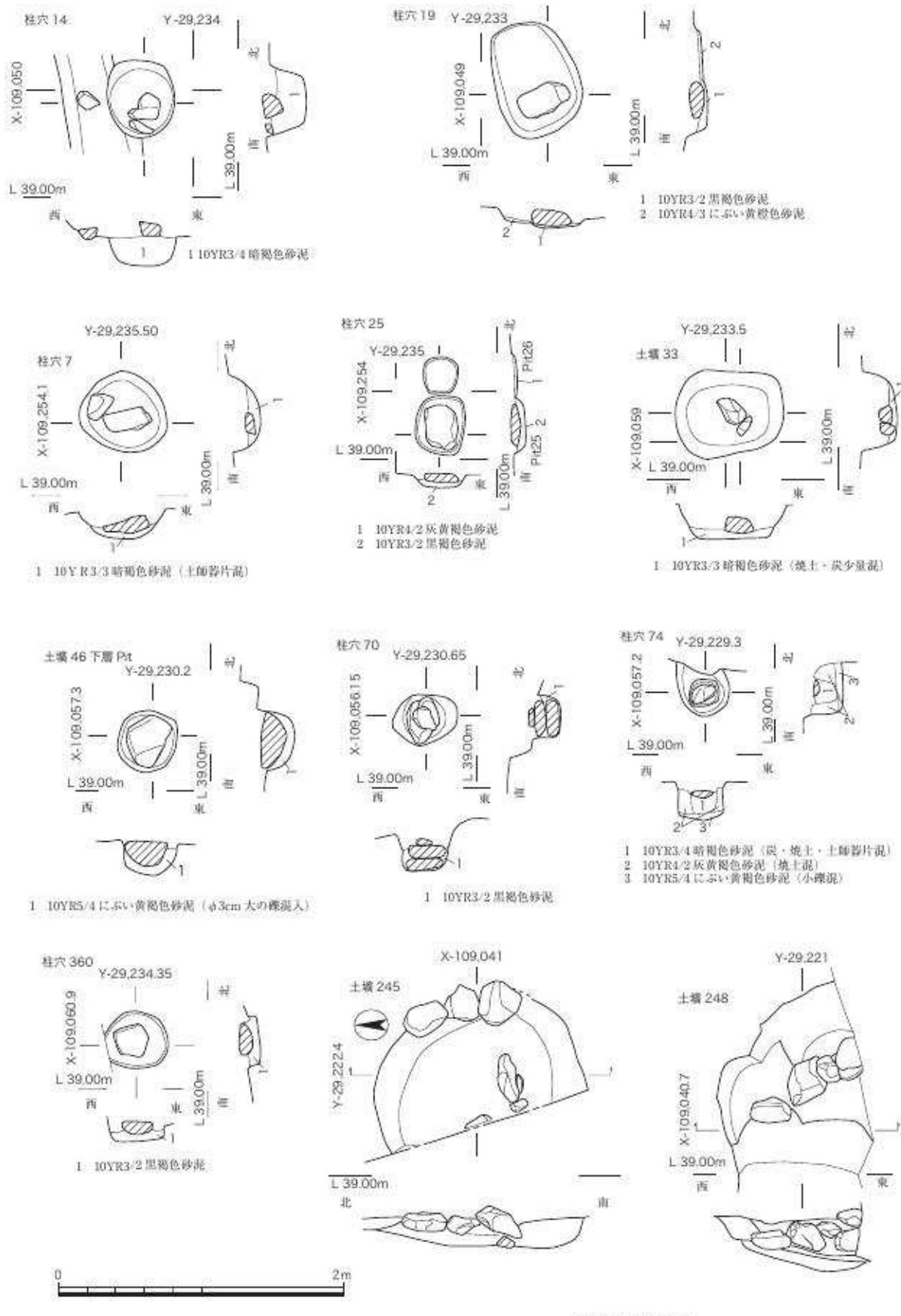


図6 遺構実測図1 (1/40)

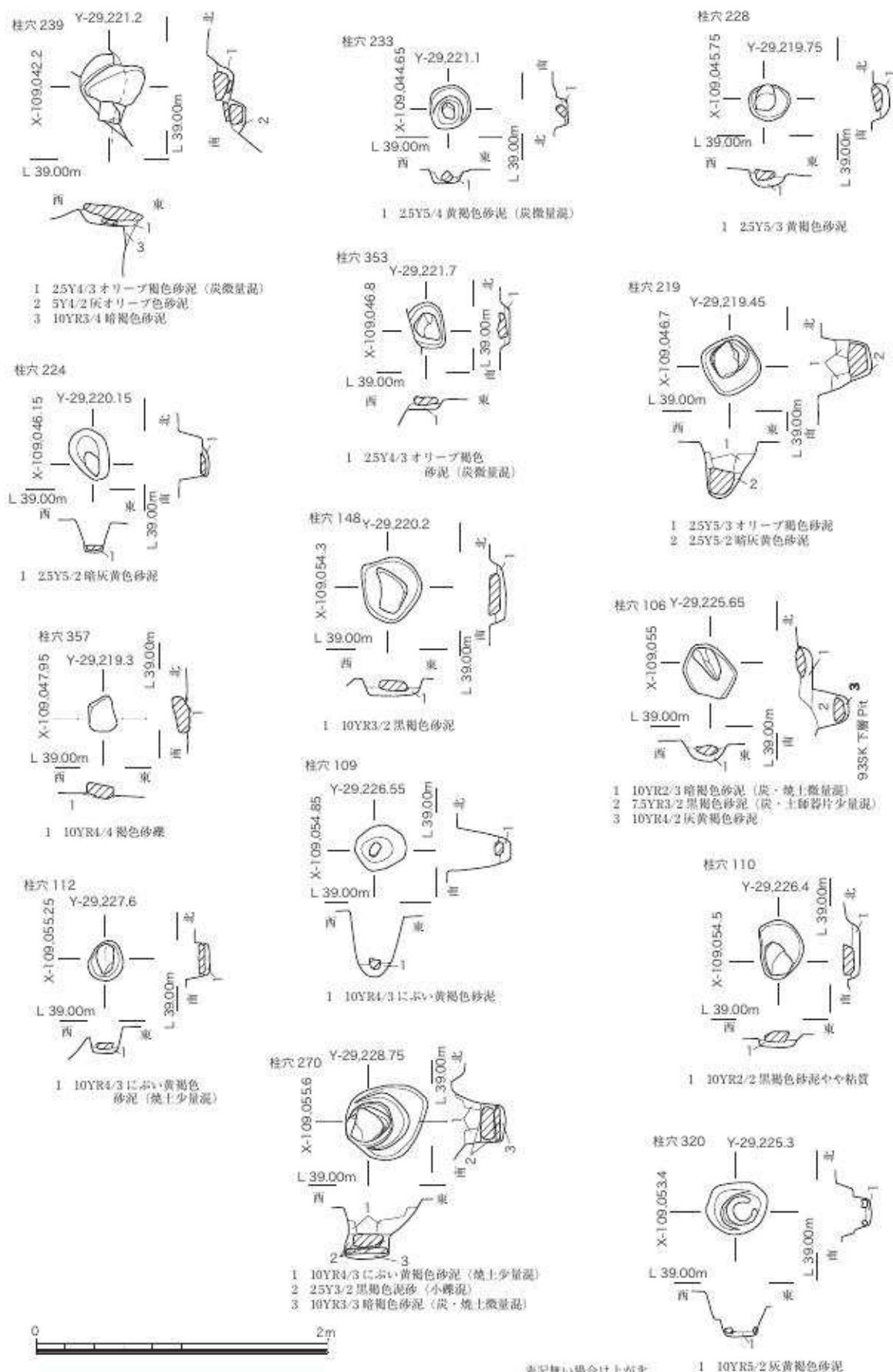
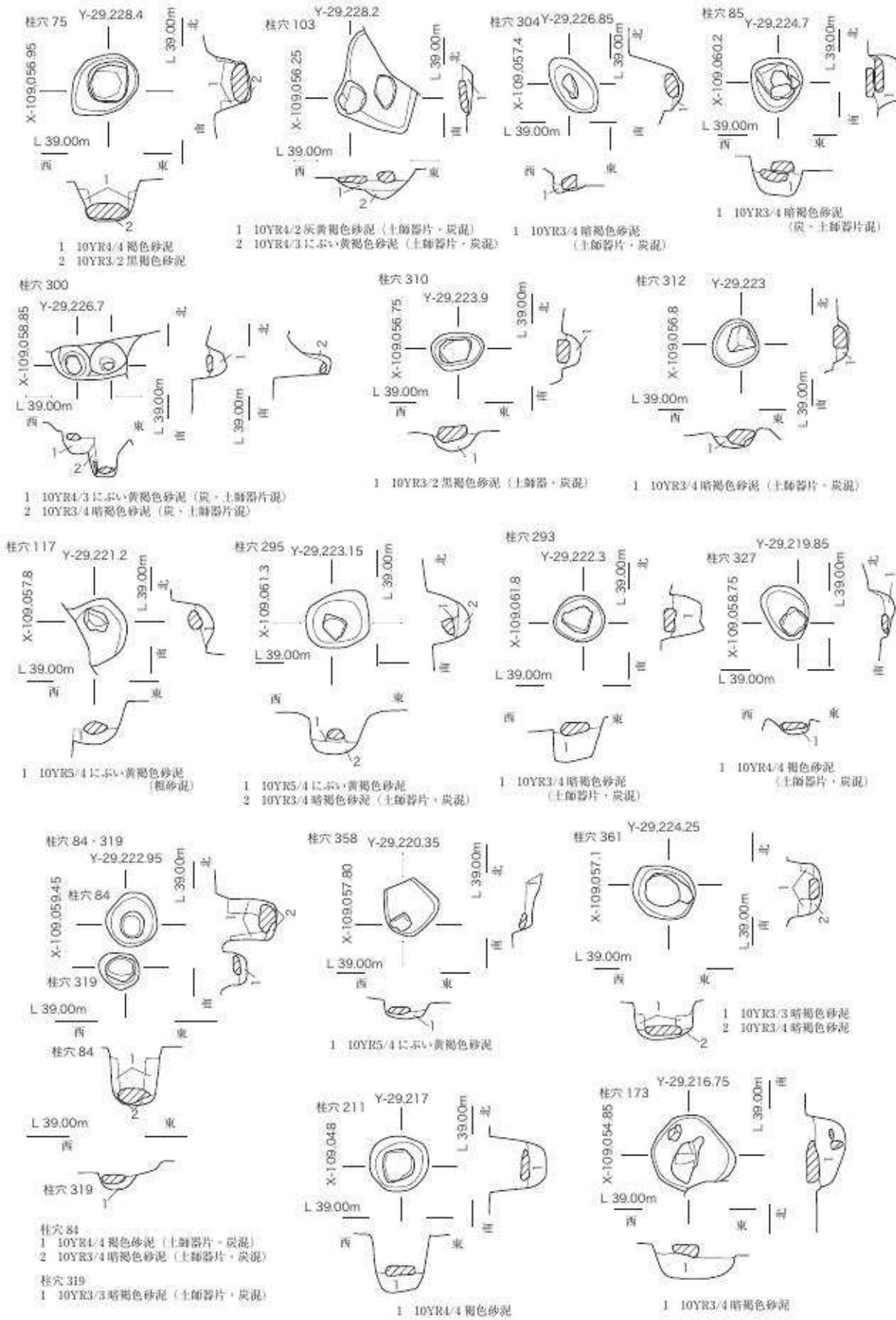


図7 遺構実測図2 (1/40)



表記無い場合は上が北

図8 遺構実測図3 (1/40)



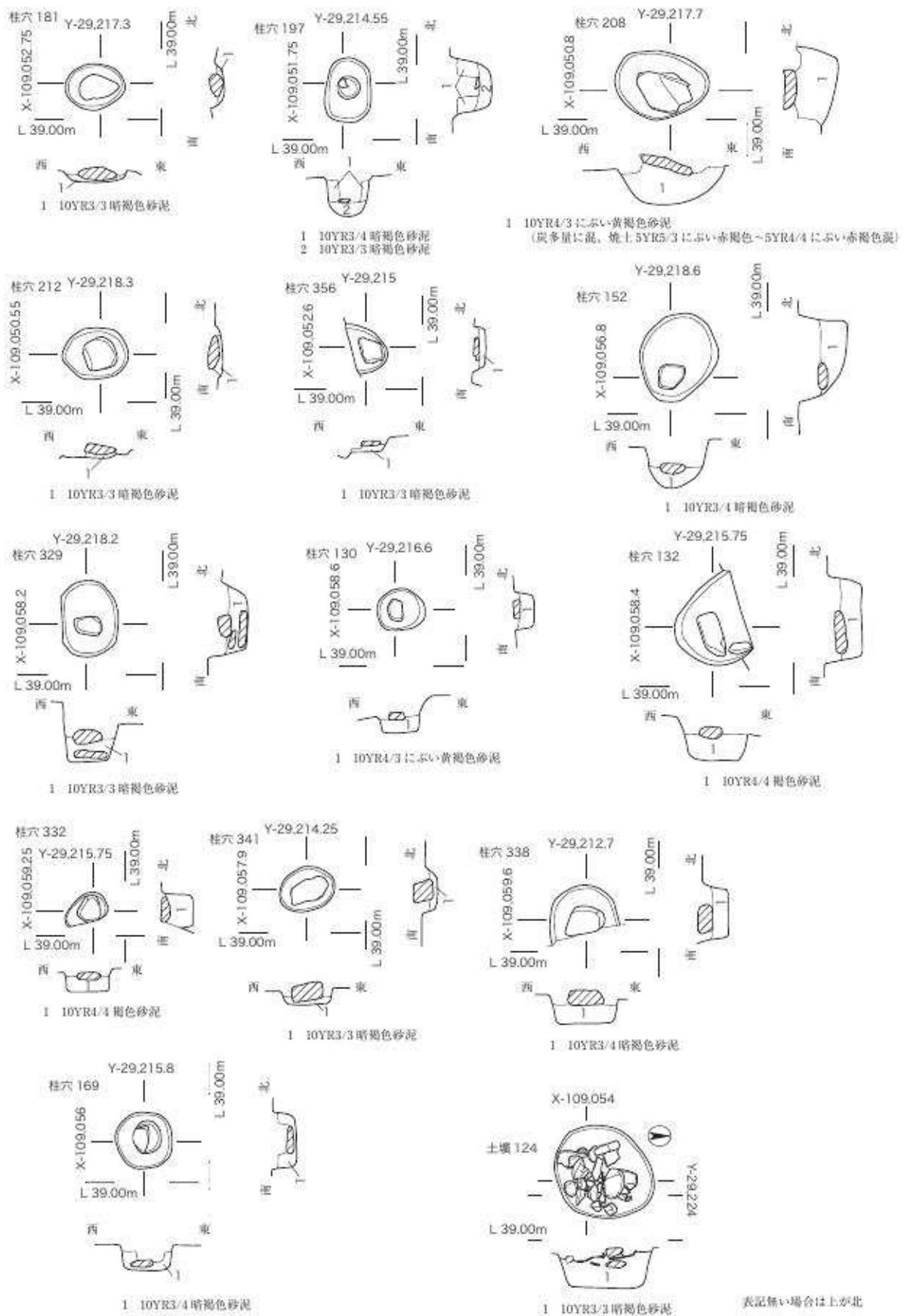


図9 遺構実測図4 (1/40)



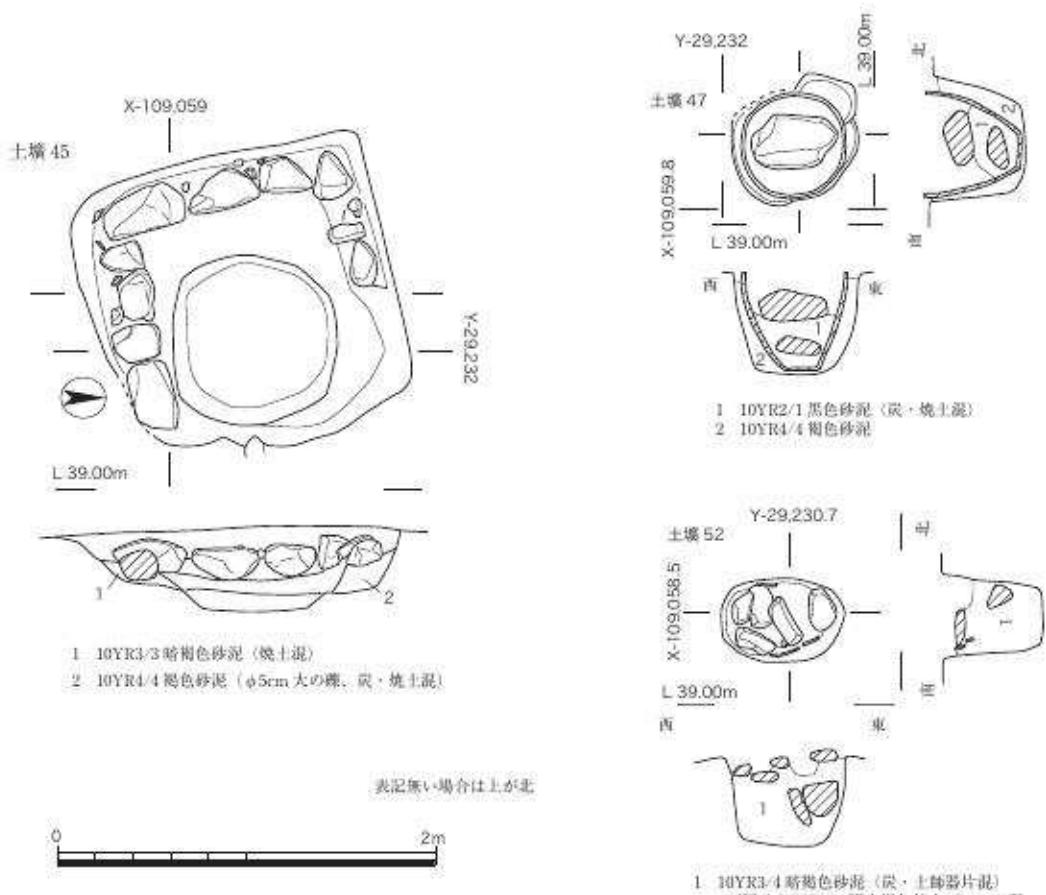


図10 遺構実測図5 (1/40)

た。東西2.6m、南北2.3mほどを測る。深さは0.15m。10YR4/4 褐色泥砂が堆積する。

#### 土壤242(図版1の2・2の2・3の3、図3)

調査区北東部で検出。半分程度は搅乱に切られている。残存部で南北2.8m、深さは0.6m程を測る。10YR4/2 灰黄色砂泥が堆積。土師器片が多量に出土する。

#### 14世紀後半～15世紀代

柱穴15・17・110・111・241・264・320・363、土壤11・84・109・123・125・127・134・140・142・230・285等がある

#### 15世紀代

柱穴16・31・128・234・302、土壤42・87がある。

#### 15世紀～16世紀代

柱穴183・199・218・219・226・239・260・350、土壤44・130・238・249がある。

#### 16世紀代

柱穴 18・19・173・179・208・308・358、土壙 65・103・108・163・170・245・248 がある。土壙 245・248 は石組を有する。

#### 土壙 245（図版 2 の 2・5 の 5、図 3・6）

元は方形の石組であったものと思われる。南北で 1.45m、深さ 0.18m を測る。東辺の石が 3 個残る。

#### 土壙 248（図版 2 の 2・5 の 4、図 3・6）

方形の石組だったものと思われる、北西部の石組がのこったものか。南北 1.3m 以上、深さ 0.45m を測る。

#### 14世紀半ば～16世紀

柱穴 7・28・50・71・74・85・91・129・152・161・216・233・235・236・244・268・273・291・293・295・301・309・321・329・330・333・338・352・361、土壙 26・54・57・80・113・132・135・206、溝 189・362。これらは時期を細かく推定できなかったもので中世半ばから後半の幅には推定できるものである。

#### 16世紀後～17世紀前半代（桃山時代）

柱穴 143、土壙 171・207 がある。

#### 江戸時代

柱穴 5・6・29・30・34・48・92・328、土壙 9・22・33・37・39・40・45・46・47・52・60・61・115・119・121・122・131・164・167・276、溝 3。これらは江戸時代に推定できる遺構群である。

#### 土壙 33（図版 1 の 2、図 3・6）

東西 0.76m、南北 0.62m、深さ 0.25m を測る。10YR3/3 暗褐色泥砂が堆積。石は平らな面が上を向いている状態。江戸時代後期か。

#### 土壙 45（図版 1 の 2・5 の 7、図 3・10）

東西 1.58m、南北 1.63m、深さ 0.45m を測る。方形の石組が 1 段残り、東辺と北辺の半分が欠失している。10YR3/3 暗褐色泥砂、10YR4/4 褐色泥砂が堆積。江戸時代後期。

#### 土壙 47（図版 1 の 2・5 の 7、図 3・10）

東西 0.65m、南北 0.65m、深さ 0.52m の掘形で。胴径 0.55m の甕を正位置に設置する。上半部は欠失。江戸時代後期。大型の石が 2 個投棄されていた。

#### 土壙 52（図版 1 の 2・5 の 6、図 3・10）

東西 0.65m、南北 0.45m の楕円形で深さ 0.49m を測る。礫、瓦片が集中していた。10YR3/4 暗褐色砂泥（炭・土師器片混）で、下層は 2.5YR5/6 明赤褐色粘土ブロックが混入。江戸時代後期。

近代以降

柱穴 118、溝 272、井戸 38・73・114、土壙 1・4・36・51・62・78・79・147。

出土遺物から時期を特定できなかったものは次の通りである。

柱穴 12・14・24・35・53・58・67・76・81・82・86・104・139・145・146・148・149・150・  
151・153・162・169・169・174・180・181・191・197・211・215・220・224・227・229・250・  
256・269・274・277・278・281・286・288・289・290・296・297・311・313・315・317・326・  
327・332・334・337・339・341・342・343・344・349・355・359、土壙 77・141・154・166・172  
・184・213・214・217・237・247・253・275・282。

## IV 遺 物

出土遺物は整理箱にして41箱ある。なお、時代区分は平安京の土器編年をもとにおこなう。出土した遺物は14世紀半ば以降のものが大半であるが、古手の混入遺物として平安時代の前期に比定できる須恵器杯類や、綠釉陶器椀なども少量であるが出土している。

### 土器・陶磁器類

#### 土壤231出土土器（図版6、図11）

土師器皿N（1～2）、皿S小型（3）、皿S（4）、皿S'（5）が出土している。皿Nが古い形態を残しているので天龍寺造営直前の14世紀前半（Ⅶ期中～新）の土器群と見ている。

#### 土壤242出土土器（図版6・7、図12・13）

土師器皿N小（6）、同皿N大（7・8）、同皿Sh（9～14）、同皿S小（15～17）、皿S（18～24）、瓦器鍋（25～27）、同羽釜（28）、播磨産須恵器鉢（29）、瀬戸系灰釉丸皿（30）、輸入陶器天目椀

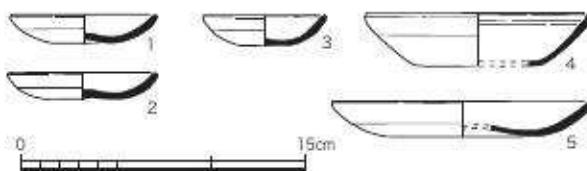


図11 土壌231出土土器実測図(1/4)

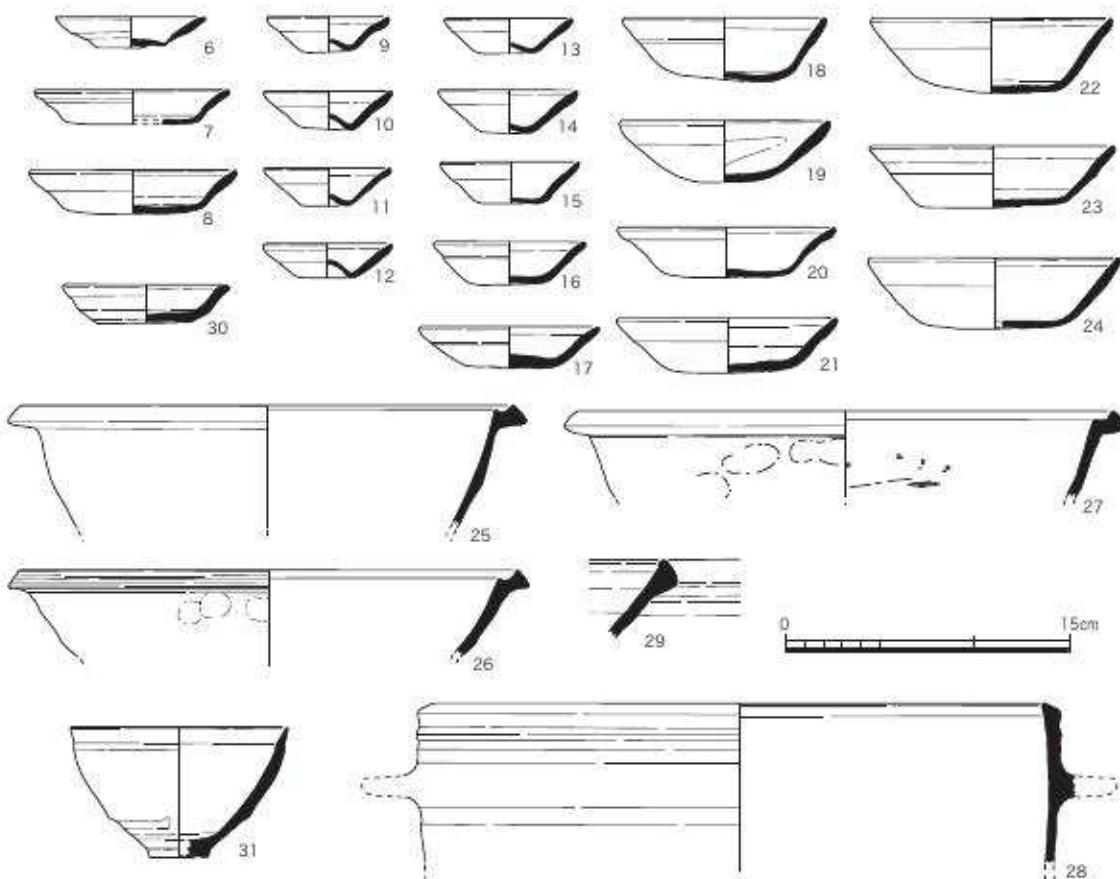


図12 土壌242出土土器実測図1(1/4)

(31) が出土。京都Ⅷ期中～新（15世紀前半）くらいに比定できると見てている。図13に示した須恵器鉢（32）は同遺構から出土し、破片も大きなものであるが、平安時代後期の古手の混入品と見ている。

#### 土壤8出土土器（図版7、図14）

土師器皿N大（33・34）、同皿Sh（35～37）、同皿S（38～

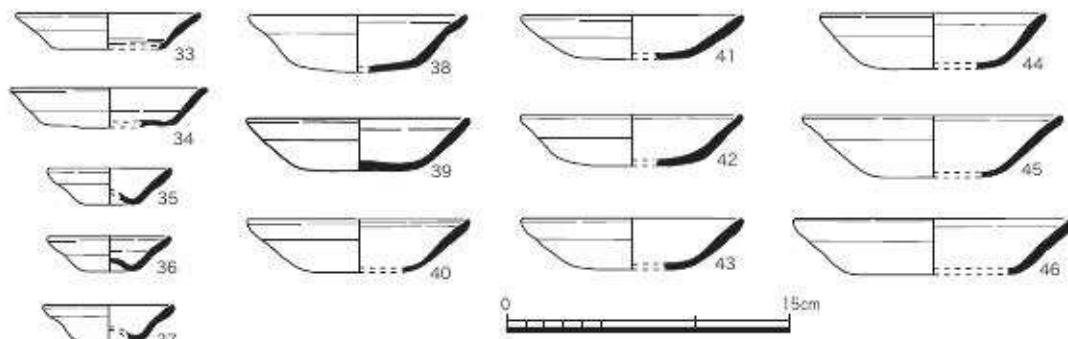


図14 土壌8出土土器実測図(1/4)

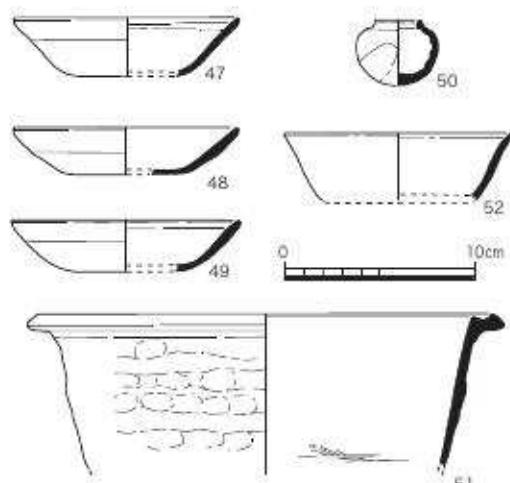


図15 土壌94出土土器実測図(1/4)

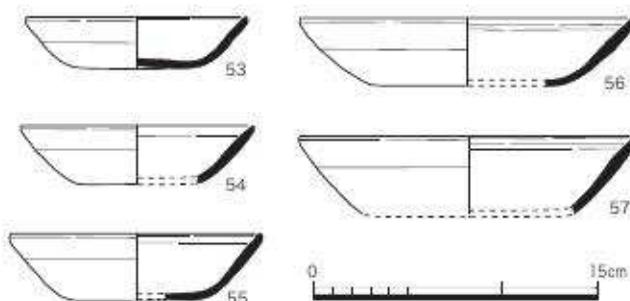


図16 土壌144出土土器実測図(1/4)



図13 土壌242出土土器  
実測図2(1/4)

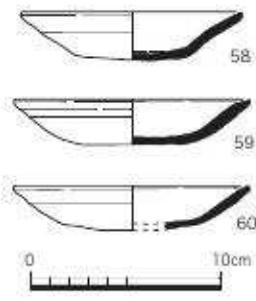


図17 土壌245出土  
土器実測図(1/4)

46) が出土している。京都Ⅷ期中～新（15世紀前半）くらいに比定できると考えられる。

#### 土壙 94 出土土器（図版8、図15）

土師器皿S（47～49）、瓦器小壺（50）、瓦器鍋（51）、輸入磁器白磁口元皿（52）が出土。

京都Ⅷ期中～新（15世紀前半）くらいに比定できる。

#### 土壙 144 出土土器（図16）

土師器皿S（53～57）が出土。京都Ⅷ期中～新（15世紀前半）くらいに比定できる。

#### 土壙 245 出土土器（図版8、図17）

土師器皿S（58～60）が出土。京都IX新～X期古（15世紀後半～16世紀半ば）くらいに比定できる。

#### 瓦類（図版8、図18）

##### 三巴文軒丸瓦（61・62）

両者とも土壙61から出土。器表は炭素がよく吸着する。

##### 宝珠雲形唐草文軒轔瓦（63・64）

両者とも土壙61から出土。中心飾りに宝珠を置き、左右対称に雲形唐草文を配する。器表は炭素がよく吸着する。いわゆる轔瓦といわれる特殊な瓦である。

##### 宝珠雲形唐草文軒平瓦（65・66）

両者とも土壙61から出土。中心飾りに宝珠を置き、左右対称に雲形唐草文を配する。器表は炭素がよく吸着する。

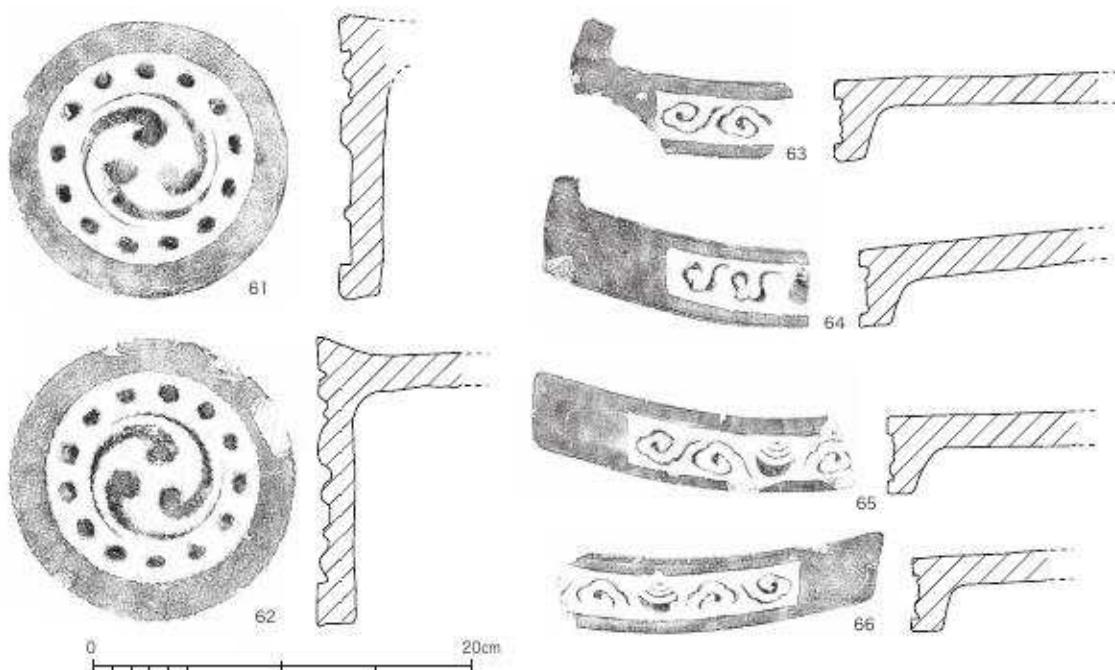


図18 土壙61出土瓦拓影・実測図(1/4)

## V 小 結

当該地は天龍寺門前村の一部となった14世紀半ば以降、遺構数が劇的に増えてくる。調査地の南辺に接する天龍寺の東門に通ずる道に人々の往来が、本調査地の土地利用にも大きな影響を与えたということは想像に難くない。遺構は14世紀半ば15世紀にかけての頃にひとつのピークがあつて、その後江戸時代を通じて遺構が確認される。大半は柱穴であり、中には柱を受けるための平らな面を上にして石を据えたものも多く見られる。多数見つかっているにもかかわらず、並びを確認できるものはなく、平安京域左京域での平安時代後期以降の柱穴のあり方によく似ている。

ここから北西方向には清涼寺、西方向には壇林寺と平安時代に成立する寺院があり、壇林寺と重なっては天龍寺、南には臨川寺、南東には宝幢寺と室町時代に開かれる寺院群とあるが、圧倒的に室町時代の物量が勝っていたようであり、平安時代の遺物も少量出土したがこれらに比べると微々たるものといえよう。こうした遺構の密度の差は嵯峨遺跡の特徴として見てもよいものと思われる。

今回の調査では天龍寺門前での人々の活動の様子が明らかとなった。室町時代の禪宗系寺院の圧倒的な力の一端が見て取れたものと思う。

表1 遺物概要表

時代	内容	コンテナ数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、綠釉陶器				
室町時代	土師器、須恵器、瓦器、国産陶器、輸入磁器		土師器49点、瓦器6点、須恵器2点、輸入陶磁器2点、国産陶器1点		
江戸時代	瓦		軒先瓦6点		
合計		44箱	66点(3箱)	41箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より3箱多くなっている。

〈註〉

註1 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 1996年

〈参考文献〉

嵯峨・嵯峨北堀町遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書－西近畿文化財調査研究所調査報告書7－ 2013年 西近畿文化財調査研究所

山田邦和「日本中世の首都と王権都市－京都・嵯峨・福原－」第4章「中世都市嵯峨の変遷」京都、文理閣、2012年  
原田正俊「中世の嵯峨と天龍寺」(『講座 蓼如』四、平凡社、1997年)、

山田邦和「中世都市嵯峨の変遷」(金田章裕編『平安－京都 都市図と都市構造』京都大学学術出版会、2007年)

山本雅和「中世京都の堀について」『研究紀要』第2号 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 1996年

吉川義彦他「臨川寺旧境内発掘調査報告書」京都市埋蔵文化財研究所調査報告第4冊 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 1978年

江谷 寛「臨川寺旧境内」「佛教藝術 115号」毎日新聞社 1977年

江谷 寛「臨川寺庭園遺跡発掘調査概要」臨川寺庭園遺跡発掘調査団 1975年

小檜山一良「嵯峨・嵐山地域の遺構分布」「京都嵯峨野の遺跡」京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 1997年

久世康博「史跡名勝嵐山」「平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要」(財) 京都市埋蔵文化財研究所 1995年

菅田 熊・吉本健吾「史跡名勝嵐山」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-10 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 2002年

内田好昭「史跡・名勝 嵐山」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-7 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 2004年

布川豊治「史跡・名勝 嵐山」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-11 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 2004年

小檜山一良「史跡・名勝 嵐山」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2006-9 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 2006年  
加納敬二ほか「京都嵯峨野の遺跡 広域立会調査による遺跡調査報告」京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊  
(財) 京都市埋蔵文化財研究所 1997年

小松武彦「史跡・名勝嵐山」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-3 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 2012年

表2 掲載遺物一覧表

口径・器高の単位はcm

番号	種類	器形	口径	器高	色調・特徴	造構・層名	実測番号
1	土師器	皿N	7.8	1.5	10YR8/3 淡黄褐色。φ 1mm 以下の小繊含む	土壤 231	29
2	土師器	皿N	8.0	1.4	10YR5/1 灰褐色、10YR8/4 淡黄褐色	土壤 231	30
3	土師器	皿S 小型	6.6	1.6	7.5YR8/3 淡黄褐色。φ 1mm 以下の小繊含む	土壤 231	26
4	土師器	皿S	12.0	2.8	10YR8/2 灰白色。φ 1mm 以下の小繊含む	土壤 231	27
5	土師器	皿S	13.8	1.9	10YR8/2 灰白色。φ 4mm 以下の小繊含む	土壤 231	28
6	土師器	皿N	7.9	1.7	5YR6/8 橙色。φ 1mm 以下の小繊含む	土壤 242	52
7	土師器	皿N	10.4	1.8	7.5YR7/6 橙色。5YR6/8 橙色。φ 1mm 以下の小繊含む	土壤 242	51
8	土師器	皿N	11.0	2.3	7.5YR8/2 灰白色。φ 0.5mm 以下の小繊含む	土壤 242	50
9	土師器	皿Sh	6.5	1.9	10YR8/2 灰白色。φ 1mm 以下の小繊含む	土壤 242	38
10	土師器	皿Sh	6.8	2.1	7.5YR8/3 淡黄褐色。φ 1mm 以下の小繊含む	土壤 242	34
11	土師器	皿Sh	6.8	2.0	7.5YR7/4 にぶい黄褐色。φ 1mm 以下の小繊含む	土壤 242	35
12	土師器	皿Sh	6.8	1.8	7.5YR8/4 淡黄褐色。φ 1.5mm 以下の小繊含む	土壤 242	37
13	土師器	皿Sh	6.8	1.9	10YR8/3 淡黄褐色。φ 2mm 以下の小繊含む	土壤 242	39
14	土師器	皿Sh	7.4	2.3	7.5YR8/3 淡黄褐色。φ 1.5mm 以下の小繊含む	土壤 242	36
15	土師器	皿S 小型	7.4	2.2	10YR8/3 淡黄褐色。7.5YR8/3 淡黄褐色。φ 1mm 以下の小繊含む	土壤 242	40
16	土師器	皿S 小型	8.1	2.3	10YR8/3 淡黄褐色。φ 1mm 以下の小繊含む	土壤 242	41
17	土師器	皿S 小型	9.6	2.2	10YR8/3 淡黄褐色。φ 1mm 以下の小繊含む	土壤 242	42
18	土師器	皿S	10.8	3.4	2.5Y8/2 灰白色。φ 2mm 以下の小繊含む	土壤 242	46
19	土師器	皿S	11.2	3.3	10YR8/2 灰白色。φ 3mm 以下の小繊含む	土壤 242	47
20	土師器	皿S	11.6	2.7	7.5YR7/4 にぶい橙色。5YR7/6 橙色。φ 1mm 以下の小繊含む	土壤 242	44
21	土師器	皿S	11.7	2.9	2.5Y8/2 灰白色。φ 1mm 以下の小繊含む	土壤 242	45
22	土師器	皿S	12.8	4.0	7.5YR8/4 淡黄褐色。φ 1.5mm 程の小繊含む	土壤 242	49
23	土師器	皿S	13.0	3.3	10YR8/3 淡黄褐色。φ 1mm 以下の小繊含む	土壤 242	48
24	土師器	皿S	13.4	3.8	10YR8/2 灰白色。10YR8/6 黄褐色。φ 1mm 以下の小繊含む	土壤 242	43
25	瓦器	鍋	27.4	—	2.5Y7/3 淡黄色。φ 0.5mm 以下の小繊含む	土壤 242	55
26	瓦器	鍋	27.6	—	5Y6/2 灰オリーブ色。7.5YR7/6 橙色。φ 3mm 以下の小繊含む	土壤 242	54
27	瓦器	鍋	29.8	—	内面 5Y8/1 灰白色。外面 5Y5/1 灰色。φ 1mm 程の小繊含む	土壤 242	53
28	瓦器	羽釜	34.0	—	2.5Y7/2 淡黄色。φ 1mm 以下の小繊含む	土壤 242	56
29	須恵器	鉢	—	—	2.5Y7/2 淡黄色。φ 1mm 以下の小繊含む。捕磨	土壤 242	57
30	瀬戸灰釉	丸皿	8.9	2.1	胎土 10YR8/3 淡黄褐色。釉 5Y6/3 オリーブ黄色。φ 1mm 程の小繊わざかに含む	土壤 242	59
31	輸入陶器	天目碗	11.5	6.9	胎土 25Y8/2 灰白色。釉 5Y3/1 オリーブ黒色。φ 4mm 程の小繊わざかに含む	土壤 242	60
32	須恵器	鉢	16.5	5.4	2.5Y7/1 灰白色～2.5Y6/1 黄灰色。φ 1mm 以下の小繊含む。古手洗入か。絞革	土壤 242	58
33	土師器	皿N	9.8	1.9	10YR8/2 灰白色。φ 1.5mm 以下の小繊含む	土壤 8	13
34	土師器	皿N	10.4	2.1	10YR8/3 淡黄褐色。φ 1mm 程の小繊含む	土壤 8	14
35	土師器	皿Sh	6.6	1.9	10YR8/2 灰白色。φ 0.5mm 以下の小繊含む	土壤 8	11
36	土師器	皿Sh	6.6	1.8	10YR8/4 淡黄褐色～7.5YR8/3 淡黄褐色。φ 1mm 以下の小繊含む	土壤 8	12
37	土師器	皿Sh	7.0	1.9	10YR8/2 灰白色。φ 2mm 以下の小繊含む	土壤 8	10
38	土師器	皿S	11.6	3.0	10YR8/2 灰白色	土壤 8	8
39	土師器	皿S	11.8	2.8	10YR8/2 灰白色。φ 1mm 以下の小繊含む	土壤 8	3
40	土師器	皿S	11.8	2.8	10YR8/2 灰白色。φ 2mm 以下の小繊含む	土壤 8	5
41	土師器	皿S	11.8	2.3	10YR8/2 灰白色。φ 1mm 以下の小繊含む	土壤 8	6
42	土師器	皿S	11.8	2.7	10YR8/2 灰白色。φ 3mm 程の小繊含む	土壤 8	7
43	土師器	皿S	11.8	2.7	7.5YR7/4 にぶい橙色。φ 1.5mm 以下の小繊含む	土壤 8	9
44	土師器	皿S	12.0	3.0	10YR8/2 灰白色。φ 1mm 以下の小繊含む	土壤 8	4
45	土師器	皿S	13.8	3.2	10YR8/2 灰白色。φ 3mm 以下の小繊含む	土壤 8	2
46	土師器	皿S	14.8	3.0	10YR8/3 淡黄褐色。φ 1mm 以下の小繊含む	土壤 8	1
47	土師器	皿S	12.0	3.1	10YR8/3 淡黄褐色。φ 1mm 以下の小繊含む	土壤 94	15
48	土師器	皿S	12.0	2.5	10YR8/2 灰白色。φ 1mm 以下の小繊含む	土壤 94	16
49	土師器	皿S	12.2	2.7	10YR8/3 ～同8/4 淡黄褐色。φ 3mm 以下の小繊含む	土壤 94	17
50	瓦器	小皿	2.5	3.5	10YR8/1 灰白色。φ 2mm 以下の小繊含む	土壤 94	18
51	瓦器	鍋	25.3	—	外側 10YR6/1 褐灰色。内側 10YR8/1 淡黄褐色。φ 0.5mm 以下の小繊含む。外面体部指ササエ。内面ハケメ敷	土壤 94	19
52	輸入白磁	口丸皿	12.2	—	胎土 5Y8/1 灰白色。釉 5Y7/2 灰白色。口縁部は露胎	土壤 94	20
53	土師器	皿S	11.8	2.8	7.5YR8/4 淡黄褐色。10YR8/3 淡黄褐色。φ 4mm 以下の小繊含む	土壤 144	24
54	土師器	皿S	12.4	3.1	7.5YR8/3 淡黄褐色。7.5YR8/4 淡黄褐色。φ 1.5mm 以下の小繊含む	土壤 144	22
55	土師器	皿S	13.4	3.6	10YR8/2 灰白色。φ 3mm 以下の小繊含む	土壤 144	23
56	土師器	皿S	17.8	3.8	2.5Y8/1 灰白色。10YR8/4 淡黄褐色。φ 5mm 以下の小繊含む	土壤 144	21
57	土師器	皿S	18.0	4.1	7.5YR8/3 淡黄褐色。φ 1mm 以下の小繊含む	土壤 144	25
58	土師器	皿S	11.8	2.6	7.5YR8/4 淡黄褐色。φ 2mm 以下の小繊含む	土壤 245	32
59	土師器	皿S	12.6	2.4	7.5YR8/4 淡黄褐色。φ 5mm と 1mm 以下の小繊含む	土壤 245	31
60	土師器	皿S	12.6	2.3	7.5YR7/3 にぶい橙色。7.5YR8/3 淡黄褐色。φ 1mm 以下の小繊含む	土壤 245	33
61	軒丸瓦	三巴文			10Y3/1 オリーブ黒色。φ 2mm 以下の小繊含む	土壤 61	61
62	軒丸瓦	三巴文			10Y3/1 オリーブ黒色。φ 1cm 程と 2mm 以下の小繊含む	土壤 61	62
63	軒丸瓦	中心飾りが 宝珠文の雲 形唐草文			10Y3/1 オリーブ黒色。φ 3mm 以下の小繊含む	土壤 61	63
64	軒丸瓦	中心飾りが 宝珠文の雲 形唐草文			10Y3/1 オリーブ黒色。φ 3mm 以下の小繊含む	土壤 61	64
65	軒平瓦	形唐草文			10Y3/1 オリーブ黒色。φ 2mm 以下の小繊含む	土壤 61	65
66	軒平瓦				10Y3/1 オリーブ黒色。φ 3mm 以下の小繊含む	土壤 61	66

## 報告書抄録

ふりがな	さがいせき							
書名	嵯峨遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	上村憲章							
編集機関	古代文化調査会							
所在地	〒 658-0032 神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地 125-1404							
発行年月日	2014年12月15日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
嵯峨遺跡	京都市右京区 嵯峨天龍寺 北造路町 1丁目	26100		35 度 00 分 59 秒	135 度 40 分 01 秒	2014.07.22 ～ 2014.09.24	413 m <sup>2</sup>	マンション 建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
嵯峨遺跡	寺院跡	室町時代	柱穴、土壙、溝、石組	土師器皿・甕、須恵器杯、瓦器、羽釜・鍋、焼締陶器甕、国産陶磁器皿、輸入磁器碗・皿、瓦類	天龍寺の創建に伴い発達を見せる遺跡。多数の柱跡を検出。天龍寺の東門に通じる龍門橋の北西部分に当たる。			



# 図 版





1 調査前風景（南東から）



2 調査区全景（南東から）



1 調査区中央部（南東から）



2 調査区東部（北西から）



1 土壙 94 (北西から)



2 土壙 144 (南東から)



3 土壙 242 (東から)



4 溝 362 (東から)



5 柱穴 14 (南から)



6 柱穴 19 (南から)



7 柱穴 33 (南から)



8 柱穴 70 (南から)



1 柱穴 360 (西から)



2 柱穴 233 (南から)



3 柱穴 353 (南から)



4 柱穴 219 (南から)



5 柱穴 270 (南から)



6 柱穴 75 (南から)



7 柱穴 300 (南から)



8 柱穴 310 (南から)



1 柱穴 329 (南から)



2 柱穴 239 (西から)



3 土壙 124 (北から)



4 土壙 248 (南西から)



5 土壙 245 (西から)



6 土壙 52 (南から)

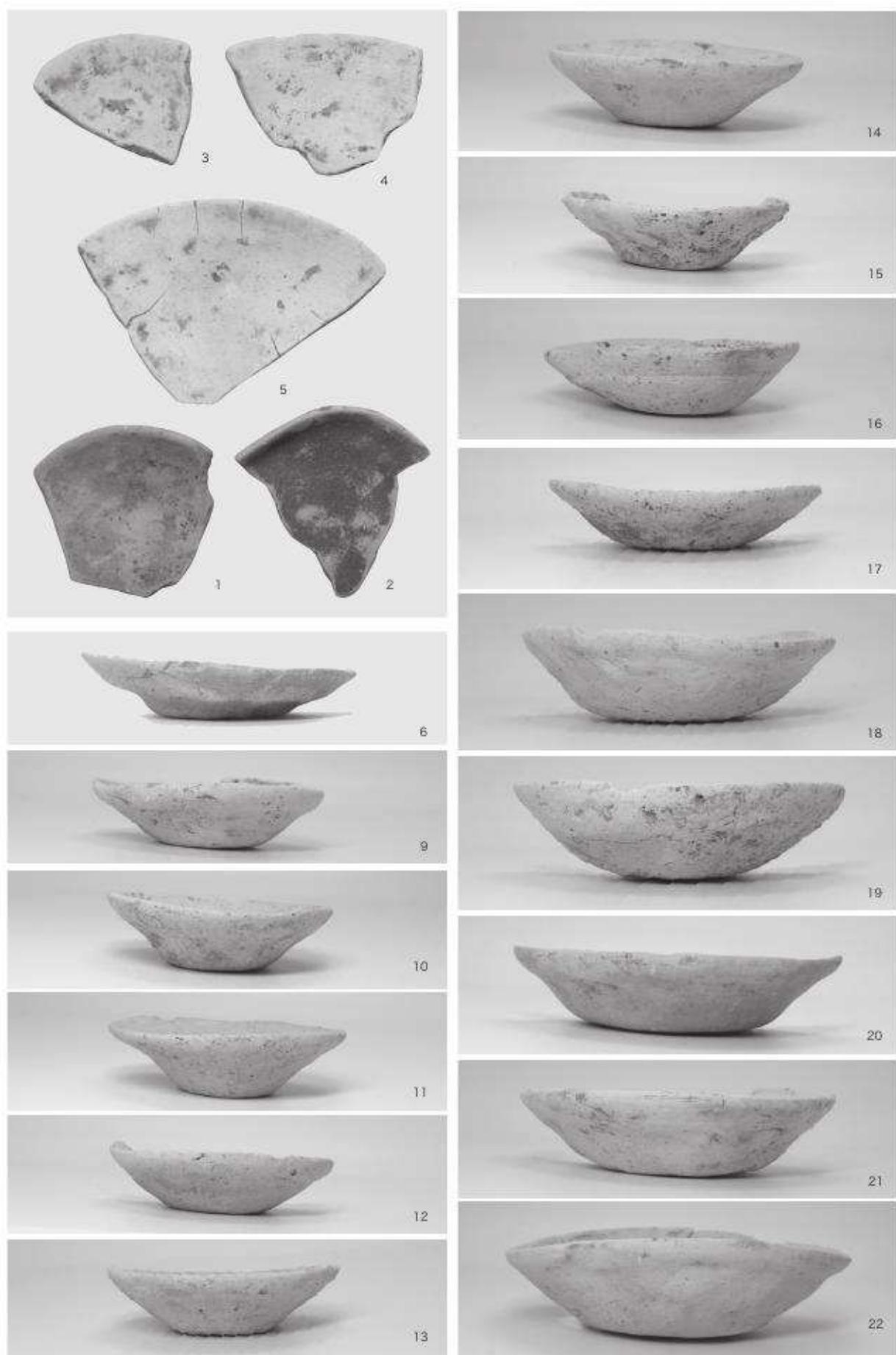


7 土壙 45 (東から)

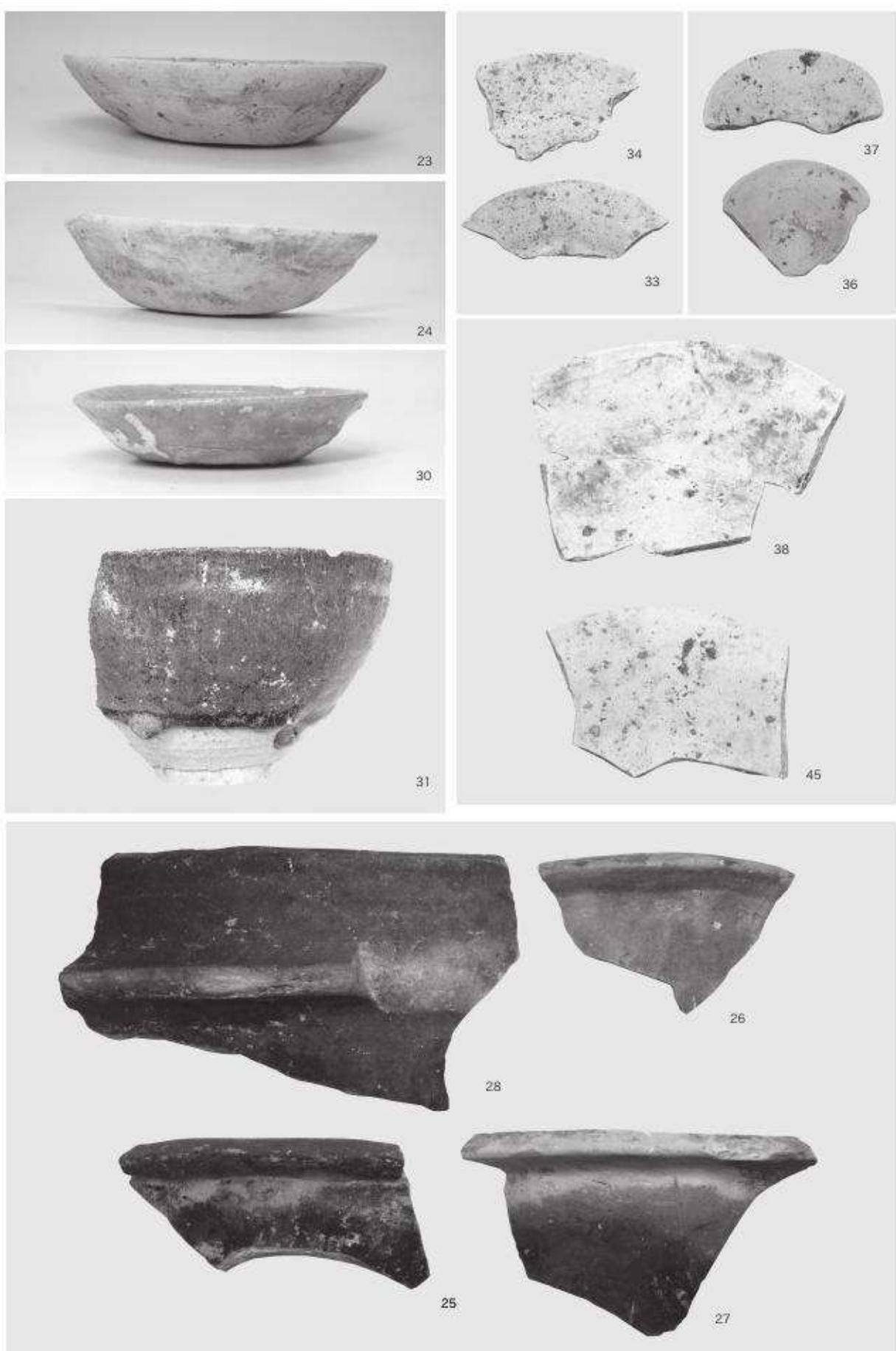


8 土壙 47 (南から)

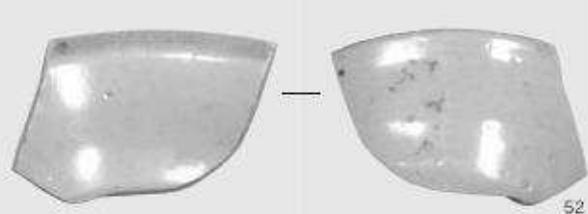
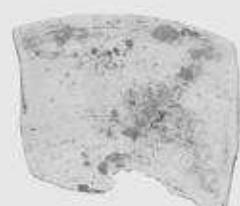
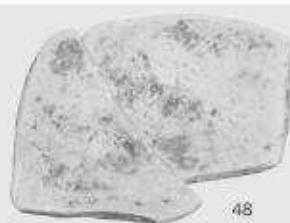
圖版六  
遺物



土壤 231 (1~5)・土壤 242 (6・9~22) 出土遺物



土壤 242 (23 ~ 28・30・31)・土壤 8 (33・34・36 ~ 38・45) 出土遺物



59



土壤 94 (47 ~ 50 · 52) · 土壤 245 (58 ~ 60) · 土壤 61 (61 ~ 66) 出土遺物

## 嵯 峨 遺 跡

発行日 2014年12月15日

編集  
発行 古代文化調査会

住 所 〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1-4-125-1404  
TEL(078) 857-6368

印 刷 (有)京都編集工房  
〒612-0868 京都市伏見区深草直達橋南1-524-24  
TEL(075) 643-6978





